

新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、今春から市内でもイベントの中止が相次ぎ、その一つに第20回「おせん様のおふじ祭」があります。

豊栄地区木積では、江戸時代から農具の箕みが作られ、大正期から昭和30年代まで周辺集落を含め約130戸、年間約8万から13万枚が製作されたとされます。

昭和30年代以降、農業の機械化で需要に変化が

見られ製作者も減少、平成17年ごろには4、5人で年間500枚ほどの製作になったと記録されています。

平成21年3月、「木積の藤箕製作技術」が国の重要無形民俗文化財に指定されました。

およそ300年前、木積村に箕作りの技術を伝えたのは、加納おせんという女性とされ、この伝説をもとに木積箕づくり保存会・ふじの会がイベントとして

があり、1735（享保20）年に亡くなったことが知られます。

なぜ、おせん様が村内に箕作りを広めたのでしょうか。木積村は江戸時代初めから明治維新まで260年ほど旗本堀氏が支配していました。稲作中心の農村に、領主が副業として箕作りを奨励したものと考えられます。それを裏付ける資料が見つかっていませんので、想像をたくましくするかありません。

堀氏は他に貝塚村（豊栄地区）と米倉村（中央地区）の一部を支配しましたが、米倉村では村内の沼地で材料となるイグサが取れたため、編みかさ製作が行われたことが、1838（天保9）年の記録に見られます。

昭和30年代から箕作りを目にしてきた筆者は、文化財指定と技術の伝承には感慨深いものがあります。

（市文化財審議会委員・

依知川雅一）

閩秘書課広報聴班



龍頭寺境内にあるおせん様の墓石

「おせん様のおふじ祭」を開催しています。木積の集落は、1300年代中ごろにまつられたと伝わる白山神社と龍頭寺を中心に成立したとされています。龍頭寺境内墓地におせん様の墓石